

ン産、杉山幸丸氏収集)を比較し、道具使用と生息環境との関係について考察した。

今回、赤道ギニアとカメルーンで採取された房付き掘り棒は、過去に報告されたものとはほぼ同じ形状であった。実験によると、樹種によって幹を折りとった時に自然に房ができる物とできないものがある程度決まっていた。また、自然に房ができない樹種は石でたたいたり、歯で噛んだりしても房を形成させることは難しかった。したがって、多くの場合、掘り棒の房はチンパンジーが棒を折り取る時に自然にできたものが多いと考えられる。各調査地で掘り棒に房がついている割合が異なるのは、チンパンジーの道具製作技術の地域差ではなく、房ができやすい、あるいはできにくい樹の環境中の割合、つまり植生の差異による可能性もある。

なお、調査結果の一部は既に学術雑誌に投稿中である。

施設 7

霊長類乳児における顔認識

桑畑裕子(京都大・院・文)

本年度は、前年度までに引き続き、マカクザル乳児における顔認識を調べる研究をおこなった。

顔刺激に含まれる全体的、あるいは部分的特徴が、被験体の偏好追視反応に与える影響と、その発達の変化を明らかにすることを目的とした。生後 0~2 ヶ月齢のマカクザル乳児が実験に参加した。刺激として、以下の 4 種類の図形を用いた：①顔図形(各構成部品の形状と全体的配置が顔様)、②部品顔図形(構成部品のみが顔様)、③顔配置図形(全体的配置のみが顔様)、④縦配置図形(部品も配置も顔様でない)。これらのうち、①-②、③-④を組み合わせ、対にして被験体に呈示し、各刺激に対する追視反応を測定した。

その結果、マカクザル乳児は、特定の刺激に対して偏好を示し、またそうした反応は発達に伴って質的に変化することが明らかとなった。生後 0 ヶ月齢の乳児は、全体として顔配置をもつ刺激に対してのみ偏好を示した(①顔=②部品顔、③顔配置>④縦配置)。生後 1 ヶ月齢になると、全体と部分のいずれもが顔様である刺激に対してのみ、偏好反応が示された(①顔>②配置顔、③顔配置=④縦配置)。しかし、生後 2 ヶ月齢を過ぎると、どの刺激ペアに対しても偏好反応が見られなかった。本実験で示されたマカクザルの結果は、ヒト乳児における顔図形偏好とその発達の変化に極めて類似しており、発達初期の顔認識において、広範な霊長類が共通の基盤を有していることを示唆しているだろう。

施設 8

霊長類の歯冠形態(切歯・犬歯の外形及び歯面形状)に関する研究

和田良光(京都歯科補綴研究所)

マーモセット科永久切歯と犬歯の歯冠形態調査の一環として、マーモセット属とタマリン属の 7 種について、style, Styloid, cingula, cingulid, 隆線, 溝などの調査を行った。

Style, styloid の出現頻度については上・下顎歯ともに 2 属間ではよく似ていた。

上顎歯第 1 切歯では distostyle の出現、欠如例がほぼ同数で、上顎第 2 切歯と犬歯では mesiostyle と distostyle の出現例が多かった。

下顎第 1 切歯では distostylid の出現率は 40%に満たず、第 2 切歯と犬歯の約 70%に mesiostylid と distostylid が存在していた。

Callithrix jacchus と Saguinus oedipus の style と styloid の出現率は Hershkovitz(1977)のそれとほぼ同程度であった。